

○サッカー王国ブラジル

空き地や交通量の少ない道路で子どもたちや青年がサッカーをしている姿を見かけた。ブラジルは経済的に厳しい国なので、使うボールはかるうじてボールと呼べるようなものだった。ゴールも石を2個ずつ置いた簡素なもので、裸足でやっていることが多いが、とても楽しそうだった。

世界選手権でブラジルが試合をする日は、商店や工場は仕事にならないため臨時休業になるほどだった。

また、突然に大きな道路を通行止めにして、ブラジルを応援する絵をペンキで描くことも珍しくなかった。それほど熱狂的だった。



道路にペンキで描かれた応援メッセージ

テレビでも毎日、中継をやっており、ひいきのチームが勝つとあちこちで爆竹が上がった。爆竹の音を聞いて、テレビのスイッチを入るとゴールの瞬間がスローモーションで何度も見られた。

○マナウスの少年



魚市場の威勢のよい少年

町の中では交差点で信号待ちの車に新聞や果物やお菓子などを売っている少年、マーケットや店の前の道路で駐車する車の見張り番をしたり洗車をしたりする少年、買い物客の荷物を運ぶ少年などの姿が見られた。



市場で野菜を売る少年



駐車した車を洗車しようと待つ少年

ジャングルでは、観光船に小舟で近寄ってきてワニ、ナマケモノ、ヘビを見せたり、果物や民芸品などを売ったりして働く姿も見られた。



アマゾン川観光客にナマケモノを見せる少年

日本の子どもたちと比べるとたいへんだなあという感じがするが、ブラジルの子どもたちは自分の力で生きているというたくましさがあり、その表情はとても明るく生き生きとしていた。言葉が通じなくても、人なつこく話しかけてくる開放的な気質があった。



アマゾン川観光客にワニを見せる少女

○Limpol (リンポール) 事件

ブラジルで最初の料理として卵焼きを作ろうとしたが、どれが油だかわからなかった。アパートに入居した時に、うちのお世話係(赴任2・3年目の家族が1年目家族の世話をする)の先生の奥様より「これが洗剤、これが油、これが調味料」と説明を受け、その時はわかっていたのだが、いざ自分で見分けようとしてみると混乱してしまった。もう一度尋ねてみてもよかったのだが、まずは自分たちの力で解決しようと夫婦で相談した。

商品名なので、辞書で調べても載っていなかった。いろいろ迷った結果、『Limpol(リンポール)』という透明の容器に入っている菜種油のような色をした液体を使った。

色は日本の油によく似ていたが、手で触れてみるとサラ

ッとしていてべとつきがない。フライパンに入れるとサァーッと小さな泡が立った。「何か変だなあ」と思いながらも、「所変われば品変わると言うから、これがブラジルの油なんだ」と変な納得をして卵焼きを作った。よく考えれば、国が違って油が違うということはないのだが...

できあがった卵焼きを夫婦でしばらく眺めていたが、何かスッキリせず、「疑わしければ、食べない方がいい。」と判断して、けっきょく食べなかった。

次の日、先輩の奥様に確認したら、なんと『Limpol』の正体は台所用洗剤で、油は缶に入っていた。大事に至らず、2人で顔を見合わせホッとしたものだった。

断水や停電もしょっちゅうだった。一度は小1の娘が発熱したため病院へ行き、帰ってくると停電でアパートのエレベーターが動かなかった。部屋の表玄関は、エレベーターからしか入れない。そこで、しかたなく、部屋の裏口から入ろうと私が娘をおんぶして、13階まで階段を上った。

しかし、なんと裏口は内側からカギをかけていたので自分の家に入ることができず、しかたなくまた降りて、停電が直るまで座り込んで待ったこともあった。

多難な前途を象徴するような生活のスタートだったが、『Limpol』事件で変な自信をつけたのか、「日本へ帰った時のみやげ話ができた」と余裕さえ生まれた。

しかし、これは序章に過ぎなかった。

○水がなくなった

飲料用の水は20リットルの水タンクをかうようになっていた。ところが、使用中の水が乏しくなって、初めて買い置きがないことに気づいた。

先輩の先生に相談することも考えたが、まずは自分でやってみなければならぬと思い、アパートの守衛さんの所へ相談に行ってみた。



20リットル入りの水タンク

未熟なポルトガル語で、「水がなくなった。うちには、水を売りに来なかった。水を買いたい。」と必死で伝えた。ジェスチャーも交えて伝えたので思いは伝わったようだが、「自分に言われても、どうしてもできない。」というような返事しか返ってこなかった。

水道の茶褐色の水には抵抗があり、翌日までやっとのことでがまんした。

○ガス爆発未遂

自宅の炊事では、プロパンガスを使っていた。

ガスがなくなると、ガス屋さんの車が通った時に、空のガスボンベを持って新しいガスボンベと交換に行った。

どのガスボンベも、遠くからの見かけはきれいだった。しかし、よく見ると銀色のペンキで塗られていて、あちこちへこんだ満身創痕の状態で、かなりの使用に耐えてきたものばかりだった。

ボンベが老朽化しているので、使用前に『ガス漏れ』があるかどうか点検してからでないと使えなかった。台所用

スポンジに食器用洗剤（Limpol）を泡立たせ、ボンベの周りに塗って調べた。

ある日、その点検をしたら、なんと洗剤の泡の下からブクブクと泡が次々に出てきたのだ。「どうしよう。ガス屋の車は、もう行っちゃった。何とかして穴をふさがないければならない。どうしたら、ふさげるだろうか。早く使えるようにしないと、炊事ができない。」と、とても慌てた。

そして、思いついた解決策は、日本から持ってきていたろうそくだった。ろうそくに火をつけて、ガス漏れの箇所にはろうそくのしずくを垂らすというものだった。

幸いにもガス爆発には至らなかったが、後で考えるとずいぶん無謀なことをしたものだ、背筋が寒くなった。

○アマゾン食文化を探った

アマゾンでは、米と並んでファリーニャも主食だった。これは、マンジョカの粉のことである。キャッサバとも呼ばれるマンジョカは、味と食感が甘味の少ないサツマイモに似ている。マンジョカには2種類あり、シアン化合物が含まれているものをマンジョカ、含まれていないものをマカシェーラと区別していた。シアン化合物を含むマンジョカを栽培するのは、ほぼアマゾン地方に限られていた。マンジョカから作られるものには、次のようなものがある。

フアリーニャ: デン・マンジョカ

マンジョカをすりおろして汁を絞り出し、残った繊維分を大きなフライパンで炒ってシアン化合物を飛ばし、乾燥させた粉（粒）

タビオカ（粉）: 別名ボルヴィリョ

上記の絞り汁を静置して底に沈殿させたデンプンの粉
日本で流行ったボン・デ・ケイジョの材料

タビオカ（粒）

上記のデンプンを小粒の球状にしたもの
日本で流行った丸い粒の冷たいデザート

トゥクビー

上記絞り汁の黄色い上澄み液を発酵させ、加熱によってシアン化合物を飛ばしたアマゾン独特の調味料

レストランでいつも食べている「ファリーニャ」を自分たちの手で作ってみることで、現地に対する理解がさらに進むと考えた。そのために、まずジャングルにある製造所に、自分一人で通った。不安もあったが、身振り手振りだけの会話で、カメラ片手に体当たり取材した。

2日間通って、なんとか製造過程を把握でき、子どもたちにも無事に体験させることができた。子どもたちは満足そうだったが、ゼロからこの体験を作り上げていった私の方が、もっと満たされたような気がした。



マンジョカの皮むき



摺り下ろした芋を絞る



大きなかまどで炒って、完成